O-4-22

看護管理者自身の労務管理への取り組み ～看護師長自身のタイムマネジメント～

福井赤十字病院　看護部

○加藤（かとう）　智枝（ともえ）、井上　和子、山崎　雪代、西郡　知代、堀口　朋美、西村智恵子

【はじめに】A病院では、看護管理者の労働時間管理の取り組みを続けている。部署におけるリーダー看護師のタイムマネジメントについて取り組み、また「所属の時間外勤務の発生要因の分析」「時間外勤務削減のための業務改善」等の時間外勤務に関する取り組みをすすめてきた。その中で看護スタッフの労務管理を担っている看護師長自身の労務管理についても検討する必要があるという課題が挙げられた。そこで、看護管理者である看護師長の労務管理につなげることを目的に、看護師長自身のタイムマネジメントの現状を調査した。【方法】看護師長が自分自身のタイムマネジメントの現状を把握し課題を明確にするために、時間外勤務の実態調査と結果分析を行なった。その結果より、看護師長に共通にみられた労務管理の課題から、改善することが困難なものと可能なものに分類した。今回は、改善可能なものに関して課題と対策を検討した。【結果】改善が困難なものとしては、他部門との連絡調整や事故発生の対応など急な対応が必要な事項が挙げられた。改善可能なものに関しての課題としては、看護師長の確認が必要な書類の流れの整理やスタッフ指導等に関わる調整等の「スタッフとの連絡調整」、17時以降の勤務に対する意識が低い等の「労働時間管理の認識」について、また看護師長が管理業務を集中して行なう場所と時間が確保されていないこと等の「勤務環境の改善」が挙げられた。そこで、対策を検討し、看護師長自身の労働時間管理に対する認識の向上と、勤務環境の改善に向けて取り組んだので報告する。

O-4-23

看護記録の質と効率の向上に向けた取り組み －看護記録委員での活動を通して－

富山赤十字病院　看護部

○中田（なかだ）　愛子（あいこ）、東　　幸、杉坂　陽子、白井志津世、篇原　志信

【はじめに】診療記録の一つである看護記録は、診療報酬の算定要件として指定されている事項もあり、正確性・一貫性が求められる。平成29年日本看護連盟の看護業務量調査結果で看護実践記録は約20%を占めている。当院では看護記録のための時間外が多く、看護師の働き方としての負担が課題である。看護部看護記録委員会で記録の質と効率の向上を目的に病状説明立会時のルールと記載形式を見直し、経過表の観察項目をセット化することで看護の視点の統一と効率の向上に向けて取り組んだので報告する。【活動内容】看護記録委員会の小グループの診療記録グループとして課題に取り組んだ。病状説明時と侵襲の大きい検査や治療に立ち会うことを医療安全推進室と連携してルールを見直した。テンプレートを作成し、記載をチェック形式にした。患者や家族の反応を書くためにフリー記載欄を設けた。経過表は疾患ごとに観察項目をセット展開し、一括で入力できるように取り組んだ。【結果】病状説明のテンプレートを使用し3か月後に全看護職員に対しアンケート調査を行った。63%が患者や家族の反応の記録が充実したと感じていた。また79%が記録の時間が短縮したと回答した。質と効率の向上につなげることができた。【おわりに】今後は作成したテンプレート、経過表のセット展開を定着させ、適切な使用ができているか監査・評価していくことが必要である。

O-5-1

大理石骨病に生じた大腿骨転子下骨折の１例

岐阜赤十字病院　整形外科[1)]、緑市民病院[2)]

○太田（おおた）　徹（とおる）[1)]、野々村秀彦[1)]、大橋　　稔[1)]、溝口　隆司[1)]、山本　恭介[1)]、栄枝　裕文[2)]

大理石骨病患者に生じた大腿骨転子下骨折を保存治療した1例を経験したので、文献的考察を加えて報告する。【症例】63歳、男性。大理石骨病。200X年、前医で右大腿骨転子部骨折に対し骨接合術を行ない感染。当科紹介され、抜釘術および郭清術を施行した。感染部からPropriobacterium acnes を検出。感染再燃をを繰り返したため再骨接合術を断念。偽関節の状態で松葉杖歩行となった。201X年、反対側の左大腿に軽度疼痛が生じ、X線写真で大腿骨転子下に細い透亮像を認めた。当初は栄養血管と考え経過観察するも、翌年突然疼痛悪化し歩行不能となり当科受診。左大腿部の腫脹と疼痛を認め、X線写真で左大腿骨転子下骨折と診断した。当然骨接合術が考慮されたが、過去の感染治療の経緯もあり、当時の主治医および患者と相談の上、最終的に保存治療が選択された。入院下に介達牽引およびLIPUSの併用が開始され、1ヶ月後には車椅子移乗および平行棒内立位訓練が可能となり、2ヶ月後にはX線写真で骨折部を架橋するように仮骨形成がみられた。疼痛改善し免荷装具着用下に平行棒内歩行が可能となり退院となった。現在は仮骨増勢傾向はあるが骨癒合はみられず、松葉杖歩行で生活している。【考察】大理石骨病は破骨細胞の機能異常が原因である全身性の骨硬化を来す稀な疾患であり、骨質が非常に硬く手術は難渋することが多い。また骨癒合が遅く後療法中にもインプラントの折損や偽関節の報告も散見される。ドリリングの際の発熱による骨壊死にて感染のリスクが高まる懸念がある。【結語】過去に術後感染を来した大理石骨病患者の大腿骨転子下骨折を保存治療し、骨癒合は得られていないが松葉杖歩行可能となった。今後も長期の経過観察を要すると考えられた。

O-5-2

心室中隔欠損の既往を持つ両肘関節内骨折患者の治療経験

岐阜赤十字病院　整形外科[1)]、岐阜赤十字病院　麻酔科[2)]

○野々村秀彦（ののむらひでひこ）[1)]、太田　　徹[1)]、山本　恭介[1)]、溝口　隆司[1)]、大橋　　稔[1)]、山田　忠則[2)]

【目的】心筋梗塞の合併症として心室中隔欠損がある。心室中隔欠損の既往を持つ両側同時受傷の橈骨頭骨折を治療した。その治療経過を、術式や手術日程の選択について特に注目し報告する。【症例】63歳男性。デスクワーク。53歳時、心筋梗塞後の心室中隔欠損に対し他院で手術を受け、抗凝固薬内服を継続していた。脚立から転落し両橈骨頭骨折および右肘関節脱臼を受傷した。当院救急外来受診し、右肘に対し脱臼徒手整復を施行した。両側の橈骨頭骨折は粉砕骨折であり、手術適応と判断された。術前検査より心機能不良であり、麻酔科より1回の手術時間を可及的に短縮する必要があるとの意見を頂いた。そのため手術は片側ずつ行う事とし、初回と2回目の手術の間を1週間開ける事とした。また、プレート固定では術後の骨折部再転位による再手術の可能性や、プレート抜釘の可能性が残り、手術回数を最小限にするためには一度で確実に完遂できる手術法がより望ましいとの結論に至った。抗凝固薬休薬の上、まず左肘に対し全身麻酔下に人工橈骨頭置換術を施行した。1週後、右肘に対し全身麻酔下に人工橈骨頭置換術および靭帯縫合術を施行した。術後は装具作成し関節可動域訓練を行った。術後1年の時点で原職のデスクワークに復帰している。【まとめ】麻酔科と充分検討をした上で、片側ずつ2回に分けて人工橈骨頭置換術を行った。術前後の全身状態には大きな問題なく、安全に周術期管理を行えた。最終的に両肘の機能は良好であり、元職に復帰できた。

O-5-3

不安定型骨盤輪骨折に対するスクリュー固定の刺入精度と安全性の検討

熊本赤十字病院　整形外科・国際医療救援部[1)]、熊本赤十字病院　整形外科[2)]、熊本赤十字病院　リハビリテーション科[3)]

○城下（しろした）　卓也（たくや）[1)]、本多　一宏[2)]、井本光次郎[2)]、細川　　浩[3)]、林田　洋一[2)]、岡村　直樹[1)]、宮本　和彦[2)]

【はじめに】iliosacral screw（以下，IS），transiliac/transsacral screw（以下，TITS）による不安定型骨盤骨折の後方要素の安定化は，早期に低侵襲で行うことが可能であるため骨盤輪骨折の標準治療の一つとなっている．しかしながら，仙骨の形状には個人差がありスクリュー刺入が困難である例もあるため，術前計画が重要である．当院で行ったC-armガイド下での経皮的スクリューの刺入精度と安全性について検討して報告する．
【対象と方法】2017年12月から2019年2月の期間に不安定型骨盤骨折に対して、スクリューで後方固定を行った7例（男性5例，女性2例，平均63.1歳），10本（IS 6本，TITS 4本）を対象とした．受傷原因，ISS，TAEの有無，骨折型，逸脱の有無，術後合併症，整復位を検討した．
【結果】全例が高エネルギー外傷で，ISSは平均24.1点，4例にTAEを行った．骨折型はB1：2例，B2：3例，B3：1例，C1：1例であった。Smith分類で正確性の評価を行い，Grade0,1,2,3が、それぞれ8,1,0,1本であり、術後合併症は認めなかった．術後整復位はRommensとHessmannの評価法を使用し，anatomic：3例，nearly anatomic：4例であった。
【考察・結語】C-armガイド下に安全にスクリューを刺入することが可能であったが、より正確な刺入を行うためには術中ナビゲーションの検討が必要である。

O-5-4

大腿骨近位部骨折に対する早期手術の取組み

日本赤十字社和歌山医療センター　整形外科

○玉置（たまき）　康之（やすゆき）、百名　克文、田中　康之、打越　　顕、奥津弥一郎、田中　慶尚、小椋　隆宏、池崎　龍仁、陸野　尚仁、伊藤　貴之、三井　俊裕

【はじめに】大腿骨近位部骨折はできる限り早期の手術が推奨されており、われわれは来院2日以内を目標としてきた。抗血栓薬を休薬せずに手術を行ってきたが、2017年の144例の先行調査では目標達成率は15%と低率であった。【目的】大腿骨近位部骨折に対する早期手術の取組みの効果と問題点を検討すること。【対象と方法】対象は、2018年4月以降の大腿骨近位部骨折177例で、男性59例、女性118例、平均年齢は82歳（19-100歳）であった。取組みとしては、前もって手術枠を確保しておくこと、初療医と手術医を別にすることとした。検討項目は目標達成率（来院2日以内の手術）であり、2017年の先行調査と比較した。また目標達成できた症例をE群、できなかった症例をL群とし、性別、年齢、左右、病名、来院曜日、来院時間、認知症、抗血栓薬、ASA physical statusについて比較検討した。【結果】目標達成率は42%、待機時間は平均3.1日で、先行調査より有意に改善していた。E群74例、L群103例の比較では、病名、来院曜日に有意差を認めた。他の項目には有意差は認めなかった。大腿骨頚部骨折、来院曜日が金土日曜日の症例は手術が遅れていた。【考察】大腿骨近位部骨折に対する早期手術の取組みによって目標達成率は有意に改善したが、達成率は42%であった。今後はインプラントの常備、月曜日の手術枠拡大、医療スタッフとの連携強化などを行い、早期手術を推進したいと考えている。